

<特集コラム2>

教師の卵を育てるということ

片山敬子

(鳥取大学教員養成センター)

はじめに

2018年4月より、教員養成センター教職相談室にて学生への相談活動を開始した。前期の相談内容のほとんどは、6月下旬から9月上旬にかけて行われる教員採用試験突破に向けた取り組みのサポートである。公立学校教員になるためには、まずは採用を希望する当該教育委員会が実施する教員採用試験を受験しなければならない。また、受験に臨む前に教職に向き合い続ける固い決意を確認し、退路を断つくらいの覚悟を持つておくことも重要である。しかしながら、実際には自分をそこまで追い込まない、追い込めない現実がある。

1 自己を知ること

教職相談室には、一般的に1年生の時から教職科目を履修し、教育実習を経験している学生の中で、教員採用試験に向かう学生がやって来る。独力で教員採用試験に向かうのではなく、準備段階での指導や支援を求めている。学生と面談し、志望動機や意志確認をした後「自己振り返りシート」を書いてもらう。教職を志望する場合は、自分で主体的に情報を収集し、自分なりの教師像を描きながらどんな試験内容を踏破していかなければならないのか、進路を見据えた段階から自分の取り組むべき道筋を正確に把握しておく必要がある。

さて、まずは自分自身を見つめ直すところから作業が始まる。一つには自分を客観的に認知するという視点と、もう一方で自分が教職を通して何を求めているのかを考えながら自分の可能性を引き出す視点をもつということが考えられる。今までどんなことを経験してきたかという振り返りも大切ではあるが、そのこと以上に経験をとおして何を考え、何を学び、どのように今の自分が形成されてきたのか、そしてさらにどんな人へと成長をめざすのかということが、人として教員として生きていこうとする自分への今後の問いかけになっていく。例えわずかずつであったとしても、その問いかけが継続していくことによって教員として基盤となる根幹が確かな成長を遂げていくのではないかと考える。

その過程の中で、改めて過去から現在に至る自らの歴史を紐解くことになる。教員という職との出会いを児童・生徒、さらには学生として誰もがその成長過程で経験しているといえばそれまでだが、自分がその立場に立とうとすると自ずと見える景色も違って来る。敢えて目を向けなければならない多くの問題や課題がより鮮明な現実として自分に迫りくるものとなる。そこで、大きな問題が浮上する。「自分にやれるだろうか？」

2 教職の魅力をどうとらえているかということ

学生に志望動機を尋ねると、過去の教員との出会いの中でその職に多くの魅力を感じ、そして今教員をめざす自分がいて、将来は自分もその教員のようになりたいという答えが返ってく

ることがしばしばある。満足度の高い児童生徒時代を過ごしたことを明るく屈託なく話す学生の表情を見ていると、楽しく充実した学校生活を過ごしたことに安堵感をもつ。また反対に少数派ではあるが、納得できない疑問を抱えたまま、教員への不信感を拭い去れないまま今を迎え、出会った教員を反面教師としつつ、葛藤しながら自分の思い描く教員像を掲げて教員をめざす学生もいる。けれども、どちらにせよ教員という職を得ようとする学生は、人との関わり、特に幼児・児童・生徒の成長への関わりに強い興味関心をもっている。だから、彼らにどのように関わるべきなのか、どのように指導すべきなのか、さらにどのような教員として彼らの前に立つべきなのかと悩み続ける。常に思考錯誤が繰り返されつつも、学生が求める「解」は「謎」で終わってしまうことも珍しくない。しかし、それでも主体的に自分のめざす教師像、さらには時代が求める教師像に近づいていこうと挑戦し続けることに情熱を傾けられるかが教員としての生命線であり、そういう生き方を具現化していく教員という職に憧れる気持ちが教職の魅力につながっているように思われる。働き方改革や教員の長時間労働が話題となる中、この時代に教員をめざす学生たち。実際には教職の魅力だけでは越えられない壁が立ちはだかることも必ずあるけれど、きっと子どもたちの素敵な笑顔に鋭く反応できるはず。「負けてはいられない！」

3 教師の卵を育てるとのこと

学生が教職と向き合おうと決めた瞬間から、彼らは教員の卵であると私は捉えている。卵がどんな卵なのか、直接関わってみないと何も見えてこないけれど。4年生になって秋に教員採用試験結果で採用通知をもらうことがゴールのように思われがちであるが、合格した学生はその一点突破が決してゴールではないことに容易に気づく。4月からの教員としての学校生活を考えた時、直採として教壇に立つ自分に自信が持てないからである。私の後期授業「生き抜く力を育てる教育」には、そんな思いを抱いた学生が集まった。

教員採用試験までは、試験内容に応じた指導を行っていくが、その過程の中で少し困難を感じることに直面した。それは、その学生が「人から学ぶ」ことができる器を持っているかどうかということである。もっと言えば、指導言を咀嚼して、自己を誠実に振り返り、改善への「気づき」が素直に得られるかどうかということである。「人から学ぶ」ということは知識・技能ばかりではない。物事の本質に迫れるかどうかである。ましてや「気づき」は教えることができない。児童生徒理解において、その言動を分析する場合、導き出されるものには、発達段階・環境・心理・性格等様々な要素が加わってくる。その際に、どんな想定が考えられるかによって、対応の仕方が大きく異なってくる。また、教員という職は、子どもたちだけでなく、その保護者、教職員、地域の人々、その他専門機関の人々など多くの人と出会い、関りをもつことになる。学生にはそんな中であって、柔軟に人から学ぶことができ、察して動ける教員になってほしいと思う。

そういう意味では、私も教員になってから、そして今でも学ばせていただいていることが多くある。児童生徒の姿に、自らの至らなさを痛感したり、一緒に笑ったり喜んだりすることで一体感を享受できたり。振り返ってみると苦い経験もあったけれど、総じて励まされたり、勇気づけられたりすることの方が多かったように思う。そう考えると、教員としての私を学校現場で一番支え鍛えてくれたのは、今まで出会った児童生徒だったように思う。学生と話していて、今までの経験の範疇に収まらない題材が持ち出されることもある。一緒に考える。アイデ

アを出し合い、選択は学生に委ねる。後で結論を確認する。「そうか・・・」と思う。

親鳥は卵を抱いて温める。ヒナが孵る様子を見ると「啐啄同時」という四字熟語が浮かぶ。親子の情愛が感じられ、ほっこりとした気分になった。しかし、ある時とあるテレビ番組で親鳥が卵を温めるのは、孵化が目的ではなく親鳥が体温を下げるため、そこに親子の情愛は存在しないことが判明した。「ポーッと生きてんじゃねえよ！」と叱られた。

学校はいろいろなタイプの教員が個性を発揮し合って成り立っている。学生一人一人を見ても、それぞれに様々な可能性を秘め、将来どんな教師に成長するのか楽しみである。教師の卵を育てることは、多くの人に支えられて成就していくことであるが、その一瞬にでも立ち会えることは私にとっては貴重な出会いである。もうすぐ私にとっての二期生が巣立っていく。焦らず驕らず教育の不易と流行を見極めながら、自分の信念を貫くことのできる教員をめざしてほしい。まだ卵の殻はくっついているかもしれないが、4月スタートに間に合うようにこれからも成長を遂げていく姿を見届けたい。

片山敬子（鳥取大学教員養成センター特任教員／前鳥取市立湖南学園校長）